

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

先史・歴史：初期入植者とアボリジニ：
1830年代のポート・フィリップ地区

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 章裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003596

初期入植者とアボリジニ

——1830年代のポート・フィリップ地区——

金 田 章 裕*

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| I. はじめに | 2. R. ホドルの初期測量とアボリジニの地名 |
| II. 初期入植者とアボリジニ | IV. アボリジニの保護と教化 |
| 1. J. バットマンとその背景 | 1. G. A. ロビンソンの活動 |
| 2. J. バットマンの契約と植民地政策 | 2. J. R. オートンの活動 |
| III. 初期土地計画とアボリジニ | V. おわりに |
| 1. ポート・フィリップ地区初期の測量 | |

I. はじめに

ニュー・サウス・ウェルズ (New South Wales) 植民地の初代総督フィリップ (A. Phillip) は、先住民であるアボリジニに対しても「公正」に接して友好関係を維持しようとした。しかし白人入植者達は、アボリジニの習慣や行動を理解することができず、次第に嫌悪と敵対感をつのらせた。白人入植者達は一方的にアボリジニが生活している土地に侵入し、その生活基盤を奪い、武力・暴力による虐殺を行った。同時に持ち込んだ新しい病気やアルコール、あるいは女性の掠奪などによって、アボリジニ社会は急速に解体した。英本国政府や総督、あるいはキリスト教徒のミッションなどによる保護や同化を目ざした活動もあったが、全体としてアボリジニの人口は急速に減少した。白人が初めて入植した1788年には推定30万人余であった人口が、1861年には18万人弱となり、20世紀前半には6万人台にまで落ち込むこととなった。とりわけタスマニア (Tasmania) とビクトリア (Victoria) の人口減は急速であった。1788年から1861年にかけて、タスマニアでは約4,500人からわずか18人に、ビクトリアでも約15,000人から2,384人へと急減した [SMITH 1980:208]。当時バン・ディーメンズ・ランド (Van Diemen's Land) と呼ばれたタスマニアにおける1820年代の虐殺はとりわけ著しいものであり、その結果1876年には最後の一人が死亡し、タスマニアの純血

* 京都大学 文学部

アボリジニが完全に絶滅したことは周知のところである。

一般に白人の移民・入植者達は、世界各地で先住の民族との敵対・抗争による虐殺を行う一方で、政策的・人道的・宗教的なさまざまな立場からの保護や同化の努力をも行ってきた。同化 (culturalization) 政策は白人社会における教育と雇用を進めることが主目的となり、保護 (protection) 政策は多くの場合隔離 (segregation) 政策と表裏一体となる。従って、A. 敵対・抗争, B. 同化・雇用, C. 保護・隔離という三極の枠の中で、場所や時期に応じて政策や社会的姿勢が揺れ動いてきたことになる。見方を変えれば、時と場所に応じて、結果的にそれを使いわけながら、支配と定着を進めてきたことになる。

オーストラリアにおいてもこの点は全く同様であるが、例えば北米やすぐ東方のニュージーランドにおいてもしばしば存在した、契約や協定などを全く欠除している点がユニークであることになる。つまり、前掲のいずれの方針に傾くとしても、あるいはいずれの方向を具体化するにしても、一切の契約や協定もなく、一方的に白人社会の規範ないし感覚によって進められたのであり、自己決定 (self determination) 主義や自己管理 (self management) 主義が政策レベルとなるのは漸く1970年代のことである。

さて、1830年代の中ごろから白人の入植が始まったポート・フィリップ地区 (Port Phillip District, 後のビクトリア) でも、入植者の姿勢は前述の三極を揺れ動くか、あるいは人物や立場によってさまざまであった。しかし、30年代のポート・フィリップ地区では、1820年代のタスマニアの経験から、有和をめざす姿勢が相対的に目立った時期であり、白人入植者がアボリジニと結んだとされる唯一の「契約」が、例外的に存在した。それにもかかわらず、ポート・フィリップ地区でも、前述のようにアボリジニは絶滅に近い人口急減を余儀なくされたのである。

小稿では、このような1830年代のポート・フィリップ地区における、初期入植者とアボリジニの接触の状況をさぐることを以下の目的としたい。この目的のためには、いくつかの方法があるであろうが、ここで採用したのは特定の人物の個人的な行動を眺める手法である。農牧業者としては、最初の入植者とみられているバットマン (J. Batman)¹⁾を、白人の入植の予備作業としての測量と区画設定にたずさわった測量官として、ビクトリア植民地の初代測量長官となるホドル (R. Hoddle) を、政府に任

1) 父 William は流刑囚としてニュー・サウス・ウェルズに送られ、母 Mary がそれを追って二人の子供と共に自由移民として入植した。1799年ごろからバットマン一家はシドニーの西のパラマッタ (Parramatta) に居住し、その第3子として生まれた。以下、バットマンの生い立ちについては [CAMPBELL 1987: 7-14] による。

命されたアボリジニの保護官 (Protector) としてはロビンソン (G. A. Robinson) を、キリスト教のミッションの立場からの活動家としては、メソジスト派 (Wesleyan) ミッションのオートン (J. R. Orton) を取りあげることにしたい。

この4人の行動によって、白人入植者のすべてではないにしろ、かなりの場合を代表させることが可能であり、前述の三極の姿勢およびオーストラリアで唯一の契約ないし協定についても検討することが可能となる。ただし、これはあくまでも白人の目からみた、1830年代のポート・フィリップ地区におけるアボリジニへの対応である。

II. 初期入植者とアボリジニ

1. J. バットマンとその背景

J. バットマンは1801年に、シドニー (Sydney) 西方のパラマッタ (Parramatta) で生まれた。パラマッタでは、メソジスト派の影響の下でマックォリー (L. Macquarie) 総督のリベラルなアボリジニ政策を受け入れており、1818年には日曜学校の生徒120人のうち19人がアボリジニであった。バットマンはここで若いアボリジニを知ったと思われ、1829年、その日曜学校の創設者の息子に、バットマンの知り合いのアボリジニ数人をタスマニアへ寄越すよう依頼している²⁾。彼は鍛冶や父の材木商の仕事をした後、1821年に弟と共にタスマニアへ渡っていたのである。彼は1823年に、600エーカーの下付地を得、また流刑囚としてホバート (Hobart) に送られたエリザ (Eliza) との間にその翌年には第1子を得た。1828年に2人の結婚が認められ、この頃にはさらに1,200エーカーの土地を購入し、4,200エーカーを借りて、250頭の牛と2900頭の羊、3頭の馬を有する有力な開拓者となっていた [CAMPBELL 1987:19-24]。

タスマニアへの白人の入植は1803年に始まった。捕鯨者やアザラシ取り猟師が、アボリジニを殺害したり、負傷させたりし、また強姦・誘拐をしたために、最初から両者の関係はよくなかった。しかも、脱獄囚が匪賊 (bushrangers) となって山野を跳梁したために、アボリジニにとってはさらに大きな打撃となった。一方白人入植者の方は、ヨーロッパにおけるナポレオン軍の戦線拡大の影響もあって急速に増大した。バットマンがタスマニアへ移った1821年はこのような時期であり、すでにアボリジニが最悪の事態に陥りつつあった。人口の増大によって1825年には、ニュー・サウス・ウェルズ植民地から分離してバン・ディーメンズ・ランド植民地となった。新植民地

2) Batman to Anstey, 22 February 1830, CSO 1/320/7578, T.S.A.

の責任者となったアーサー (G. Arthur) 準総督は、植民地担当国務大臣バサースト (H. Bathurst) の新しい指令³⁾に基づいて、全島を郡・ハンドレッド (hundred) ・パレッジ (parish) に分割すべく測量長官に指示し、早速測量が開始され⁴⁾、入植は一層進んだ。

白人の入植の進行によって、いままで生活をしてきた良い土地を奪われてしまったアボリジニは、時折婦女子を襲ったり、小屋に火をかけたりするようになった。白人入植者達はアーサー準総督に強硬な手段をとるよう要求し、「あらゆる適当な手段」を用いる許可を得た。現実にはアボリジニの虐殺がなおも続き、1827年末にはアボリジニを入植地から引き離す旨の公示をした。同時に、絵によってアボリジニにも白人と同様の権利があることを説明しようとしたが、これは失敗であった。やがてアボリジニを隔離するという政策も実効がないことが判明し、1828年11月1日遂にアボリジニに対する戒厳令が発された。アボリジニを生かして捕縛した場合、大人1人5ポンド、子供1人2ポンドが支払われることになっていたが、実際にはほとんどが殺害された。1828年末から翌年にかけての1年ほどの間に全島の約3分の2のアボリジニが抹殺されたと推定されている [LAIDLAW 1981]。

バットマンはこの間にアボリジニの探索・討伐隊に参加し、1829年6月15日にはアボリジニ捕縛隊を組織することを植民地政府に申し出、これらの貢献の結果2,000エーカーの下付地を得た [CAMPBELL 1987:27-30]。前述のようにシドニー近郊の旧知のアボリジニをタスマニアに呼ぼうとしたのも、バットマンがこの企画に際し、タスマニアのアボリジニの探索に彼等を使用するためであった。後にバットマンはアーサー準総督への報告の中で彼が11人のニュー・サウス・ウェルズのアボリジニと一緒に居住しており、政府の対アボリジニ政策に役に立ってきたと述べている。さらに、何人かのシドニーのアボリジニは英語や英国の習慣に精通し、農業を営むことも覚えたとしている⁵⁾。

バットマンの捕縛隊は多くのアボリジニの男を殺害しつつも、何人かの女性と子供を捕縛した⁶⁾。彼は、ピジョン (Pigeon) とクルック (Crook) というシドニーのア

3) Earl Bathurst to Sir Thomas Brisbane, 1 January 1825, H.R.A. I(XI): 434-444.

4) 厳密にはこの時点ではまだニュー・サウス・ウェルズ植民地内。分離は7月17日付の勅令により、実際には12月の執行委員会の創設によって発足する。ハンドレッドは約100平方マイル、パレッジは約25平方マイルの区画であり、社会的・行政的単位となることが期待されたものである [金田 1985:186-193]。

5) John Batman to Sir George Arthur, 25 June 1835, H.R.V. 1: 5-10.

6) レイドローによれば、15人殺害したとされる。また、捕縛したのは女性・子供各一人とする [LAIDLAW 1981: 44-72] が、キャンベルは複数とし [CAMPBELL 1987: 37-44], 1930年のアーサーの報告も複数の女性としている (Arthur to Murray, 15 April 1830.)。

ボリジニと共に、この女性を通じてタスマニアのアボリジニを慰撫しようとした。この計画は、当の女性が逃亡したために全く失敗に終わったが⁷⁾、アーサー準総督はこの計画について本国へ、「北東部で働いているバットマンは、何人かのアボリジニ女性を介在させることによって、この地区の部族の慰撫について極めて理にかなった見通しを有している」と報告している⁸⁾。

1830年9月にはブラック・ライン (the Black Line) と呼ばれる計画が実行に移された。アボリジニをタスマニア島東南のタスマン半島 (Tasman Peninsula) に追い込んで捕縛しようとしたものであった。しかし結果的には、この計画も多くのアボリジニを殺害しただけで失敗に終わった [CAMPBELL 1987:45-53]。バットマンは再び彼の捕縛隊の活動を求めたが、彼の意図はすでにアーサー準総督のそれとはく違ってきており、準総督の意を受けて活動を開始するのは、後述のロビンソンであった。バットマンは総督府官房長に宛てた手紙の中で、「私の努力は、アボリジニの捕縛ないし壊滅の方途において、何らかの有益な結果をもたらす⁹⁾と述べているように、彼はアボリジニの殺害そのものをも意図していた。アボリジニとの友好的なさまざまなコンタクトも、全く功利的ないし現実的なものであったことを推測させるに十分であろう。

バットマンはまた、このころミッチェル (T. L. Mitchell) やスタート (C. Sturt) などが成功させたような探検についても強い関心を有し、その実施を計画した。彼と彼の友人は、アボリジニ討伐がほぼ終了したことにより、探検に対する植民地政府の支援が得られ易いと考えたようである [CAMPBELL 1987:64-65]。ところが思うようには事が運ばず、また目的地についても若干の曲折を経た。しかし、やがて目的地が大陸東南部のポート・フィリップ地区に定まり、1835年5月までには船をチャーターして出発を急いだ。ローンセストン (Launceston) のフォークナー (J. P. Fawcner) が船を購入して、やはり探検を準備しているとの情報があったからである [CAMPBELL 1987:66-68]。バットマン一行は5月12日にローンセストンを出港し、ポート・フィリップ地区へ向った¹⁰⁾。この探検の最初の報告書がアーサー準総督へ送られたのは1835年6月25日であった¹¹⁾。

7) ビジョンとクルックは21日間も捜したが、見つからなかった [CAMPBELL 1987:37-44]。

8) Arthur to Murray, 15 April 1830 [TURNBULL 1948]

なお、小稿では、Natives, Aboriginal Natives, Blacks, Native Blacks といった表現も、便宜上すべてアボリジニと訳している。

9) Batman to Colonial Secretary, 27 November 1830, CSO 1/320/7578, T.S.A.

10) John Batman to Sir George Arthur, 25 June 1835, H.R.V. 1: 5-10。ただし、次は5月9日としている。J. Batman, Journal of Journey to Port Philip 1835, MS11248, LT.C.

11) John Batman to Sir George Arthur, 25 June 1835, H.R.V. 5: 5-10。

2. J. バットマンの契約と植民地政策

ポート・フィリップ湾岸のヤラ（当時 Yarra Yarra）川付近はウルンジェリ（Wurundjeri）族，その東南がブヌロング（Bunurong）族，ウルンジェリ族の西南がクルング（Kurung）族，さらにその西南がワタウルング（Wathaurung）族の領域であった [TINDALE 1974: map]。1835年5月26日に，7人のシドニー・アボリジニを伴って，バットマンはポート・フィリップ地区に上陸した¹²⁾。当時バットマンや彼の友人ウエッジ（H. Wedge）等が，ヤラ川流域でコンタクトを有した部族（tribe）をドッタガラ（Dutagalla, Dutigalla）としているが¹³⁾，これはウルンジェリ族の1クラン（clan）であったと考えられている [CAMPBELL 1987:76-79]。6月25日付のアーサー準総督への報告¹⁴⁾によれば，最初のコンタクトの状況は次の如くであった。

まず初日に20人の女性と24人の子供からなる集団に出会い，その内の2人はシドニーのアボリジニと似た言葉をしたので，その2人を通して話をし，毛布・ネックレス・斧・ナイフ・はさみ・鏡などをプレゼントした。7日目に，最初火を見つけた場所で，男とその妻および3人の子供に出会い，^{おき}長達の名前と居場所を聞き，その案内で長達のところへ向った。しばらくして「部族」と会い，先日のプレゼントの話をするとかれらは持っていた槍などを草の中に捨て，やがて訪問の目的が判明すると，長達はかれらの妻や子供のところへ進むよう促した。かれらは武器を拾う許可を求めたのでそれに同意すると，中心的な長が彼の良い槍をくれたので，お返しに銃を贈った。それからいくつかの小屋のあるところへ行き，「部族」全員に紹介された。約20人の男を含み，全体で55人であった。

正午頃に「部族」のところにやってきて，翌日の正午頃までそこにとどまった。妻と7人の娘と共に，羊と牛を持ってきて入植するために，かれらの土地の一部を購入したいこと，かれらを保護し，またシドニーのアボリジニと同様に雇用したり，衣服や食糧を与え，また土地を購入した代償を毎年支払うことなどを説明した。長達が申し出を了解した後，購入したい土地を説明し，境界を丘で示したところ，彼等も固有の名称で追認したので，地図にその境界線を記入した。

翌日，長達と共に境界線のところへ行き，彼等は境界の隅の木に固有の印を付けた。このあと，2人の通訳を通して契約書を注意深く読み，3人の主要な長と5人のこれ

12) John Batman to Sir George Arthur, 25 June 1835, H.R.V. 5: 5-10.

13) George Stewart to Colonial Secretary, 10 June 1836, H.R.V. 1: 39-43 においては Dutagalla, [CROLL & WETTENHALL 1937: 27] および注15) では Dutigalla としている。

14) John Batman to Sir George Arthur, 25 June 1835, H.R.V. 5: 5-10.

に次ぐ長が3通の証書に署名し、それぞれから土片を受けとった。

このようにしてバットマンが購入したとするのが、図1に示された逆台形のような範囲である¹⁵⁾。バットマンは契約書の写しを添えてバン・ディーメンズ・ランドのアーサー準総督に報告した。本国政府がこの契約を認めるであろうことおよび13人の他の入植希望者名などをも記している。出発前に仲間の1人に契約書の原稿を送るよう求めている¹⁶⁾ことからしても、バットマンは初めからこのような契約を意図していたと考えられる。

この報告を受けたアーサー準総督は官房長を通じてバットマンに、彼の契約が「原則を逸脱している」ので恐らく無効であろうと通告した。ポート・フィリップ地区はバン・ディーメンズ・ランドから近いが、すでに1803年以來の探検によって英国領となっており、またバン・ディーメンズ・ランド政府の管轄下でないというのがその理由である¹⁷⁾。

しかし他方で、アーサーはバットマンの報告を歓迎し、引き続き報告をするように指示する¹⁸⁾一方、ポート・フィリップ地区がバン・ディーメンズ・ランドから近いこと、バットマンの人物や踏査を評価して契約に見合うような下付地を与えたいこと、彼と彼の仲間が新しい入植地で成功すると思われること、などを列挙し、暫定的にそこをバン・ディーメンズ・ランド政府の管轄とすることを本国政府に打診した¹⁹⁾。アーサー自身は契約を必ずしも否定しているわけではなく、むしろ評価する立場をとっているが、これは同時に行政管轄範囲の拡大を意図していることの一面でもあった。

このような動きに対して、ポート・フィリップ地区を管轄するニュー・サウス・ウェルズ植民地のバーク (R. Bourke) 総督は、次のような布告を出してこれを非合法とした。つまり、同植民地内において、「アボリジニとの協定・契約・コンタクトなどのまねごと」による土地の所有を一切認めないことを宣言し²⁰⁾、その旨バン・ディーメンズ・ランド政府からもバットマンに伝えるよう指示した²¹⁾。バーク総督は、本国政府に対しても改めてポート・フィリップ地区の管轄権を主張し²²⁾、その訓令を

15) Map of Part of New Holland Shewing the Territory of Geelong and Dutigalla Acquired by Treaty with the Native Chiefs, 6 June 1835, H.R.V. 1:4.

16) Batman to Gellibrand, 1 May 1835, C171, M.L.

17) John Montagu to John Batman, 3 July 1835, H.R.V. 1:10-11.

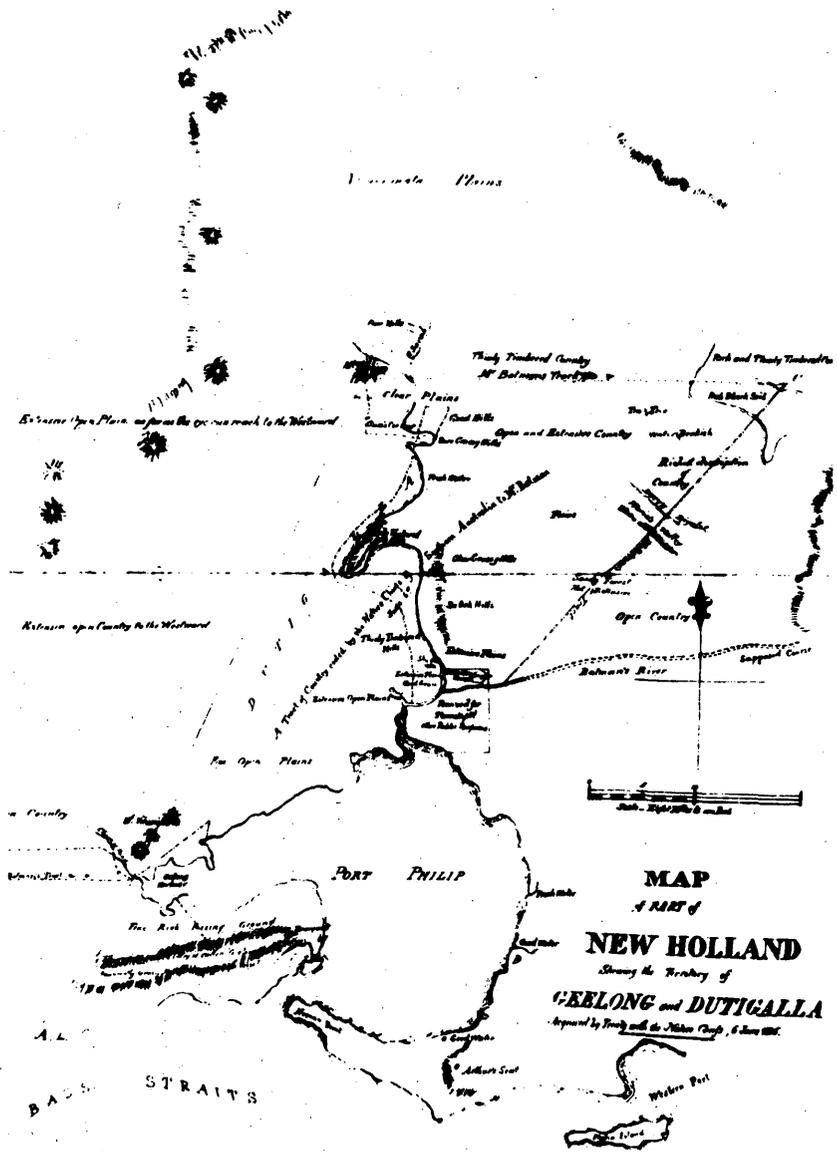
18) *ibid.*

19) Sir George Arthur to Rt. Hon. Spring Rice, 4 July 1835, H.R.V. 1:11-12.

20) Proclamation, 26 August 1835, H.R.V. 1:12-14.

21) Colonial Secretary to John Montagu, 1 September 1835, H.R.V. 1:14-15.

22) Sir Richard Bourke to Lord Glenelg, 10 October 1835, H.R.V. 1:15-19.



Map of part of New Holland, Shewing the Territory of Geelong and Dutigulla Acquired by Treaty with the Native Chiefs, 6 June 1835.

図1 J.パットマンの「契約」範囲

待った²³⁾。これに対する本国政府の返答は、入植を禁止するのではなく、植民地政府の統制の下にそれを認めるよう指示したものであった²⁴⁾。

バットマンや彼の仲間達はさまざまな形で土地取得の正当性とポート・フィリップ地区の行政組織の整備の主張を繰り返したが、契約は遂に評価されなかった。土地の入手をめぐる論点は、全く英国法の管轄範囲と適用の問題として扱われたことになる。この後、ポート・フィリップ地区の土地は競によって販売されることになった。しかし、バットマンとその仲間には、新天地の開拓者としての努力を認め、間違った認識の下ではあるがアボリジニから土地を購入するために出費をし、また現実に小屋を建てたり、若干の畑を耕したりしているので、合計7000ポンドが支払われることとなった²⁵⁾。アボリジニとの契約は認められなかったが、彼等自身は評価を得たのである。バットマンは、程なく計画されたメルボルンに多くの土地を入手することになり、その後も現実的にアボリジニの雇用を続けることになる [CAMPBELL 1987:207]。

以上のように、アボリジニとの契約そのものは「まねごと」としか見なされなかったのであるが、一切の契約・協定なしにアボリジニを扱い、またその居住地を英国法の下で管理することについて、当時次のような解釈がなされていた。つまり、植民地の「領域に住むすべてのアボリジニは女王の臣民として考えられねばならない」のであり、彼等を戦争で征服した場合のような「在留外国人とみなすこと」が、彼等の旧来の所有権などを否定することになる、とするのである²⁶⁾。すべてが一方向的なレトリックであり、一般的にいってもアボリジニと地方政府との間の協定・契約は不適當であるとし、入植者との関係はできるだけ少なくすることが望ましい、と考えられたのである²⁷⁾。バットマンやアーサーは同化・雇用の立場に近く、英本国政府は保護・隔離の立場を採っていたことになるが、その背景は英国の領有権・支配権の保持であり、ニュー・サウス・ウェルズ植民地政府はその管理の姿勢が前面に出ていることになる。

23) Colonial Secretary to John Montagu, 23 December 1835, H.R.V. 1:23.

24) Lord Glenelg to Sir Richard Bourke, 13 April 1836, H.R.V. 1:24-26.

25) Sir Richard Bourke to Lord Glenelg, 12 November 1836, H.R.V. 1:29-31.

26) Lord Glenelg to Sir Richard Bourke, 26 July 1837(extract), H.R.V. 2A:69-71.

27) Report from the Select Committee on Aborigines; House of Commons, 26 June 1837(extract), H.R.V. 2A:62-69.

Ⅲ. 初期土地計画とアボリジニ

1. ポート・フィリップ地区初期の測量

アボリジニとの契約を「まねごと」と断じたニュー・サウス・ウェルズのパーク総督は、一方でポート・フィリップ地区の実質的な管理を進めるために、3人の測量官を任命した。1836年9月10日付で任命されたのは、ホホワイト (G. B. White)・ダーシー (F. R. D'Arcy)・ダーク (W.W. Darke) であった²⁸⁾が、ホホワイトはポート・フィリップ地区の測量責任者となることを断り、代わりにその任に就いたのはラッセル (R. Russell) であった²⁹⁾。

当時のニュー・サウス・ウェルズでは、水流に接している部分などの自然的条件に対する特別の対応を除けば、測量された土地には東西・南北方向の1マイル方格のセクション (section) が設定され、下付地・入植地の選定に利用されることになっていた。さらに、約25平方マイルをパリッシュ (parish)、約100平方マイルをハンドレッド (hundred)、約40マイル四方を郡 (county) とするのが規定であった [金田1985:143-175, 203-219]。

測量長官代理のペリー (S. A. Perry) は、10ヵ条にわたる訓令と4ヵ条の追加訓令によって、ラッセルに詳細な指示を与えた³⁰⁾。ラッセルは、ポート・フィリップ湾岸やポート・フィリップ盆地一帯の測量と、セクションの設定を推進すべきことと、アボリジニに関する次のような行動と記録・報告を義務付けられた。まず、測量隊員に対し、「アボリジニと争ったり、アボリジニを刺激して敵対行動を起こさせたりすることを厳格に禁止し」、測量が妨げられることがないようにすることが命じられ、さらに「『部族』のそれぞれの人数を可能な限り事実近くに」、また「どのように武装しているのか、それは戦いのためかあるいは単に獲物を追うためか」といったことを報告書に述べるよう指示している。翌年1月27日には36挺のカービン銃の支給が決定され³¹⁾、間もなくより安価なカスケッ銃に代えられているが³²⁾、この一連の決定はやはりアボリジニとの戦闘を想定したものと考えるべきであろう。

28) Sir Richard Bourke to S.A. Perry, 10 September 1836, H.R.V. 5:4-5.

29) S.A.Perry to Sir Richard Bourk, 10 September 1836, H.R.V. 5:1-2.

30) S.A.Perry to Robert Russell, 10 September 1836, H.R.V. 5:6-8.

S.A.Perry to Robert Russell, 15 September 1836, H.R.V. 5:10.

31) S.A. Peery to Colonial Secretary, 27 January 1837, H.R.V. 5:31.

32) S.A.Perry to Colonial Secretary, 21 March 1837, H.R.V. 5:32.

さて、ラッセルは1836年11月25日に、部下の2人に測量開始を命じ³³⁾、翌日にはその開始が確認された³⁴⁾。翌年2月28日には測量が急速に進行しているとの報告をしているが、任命されてからすでに5ヵ月を経ており、総督・測量長官代理からみて極めて不十分な成果であったようである³⁵⁾。

一方、有能な測量官としての評価を得ていたホドル (R. Hoddle) は、1月にポート・フィリップ地区への上級測量官としての派遣を希望していた³⁶⁾。これは却下されたが、測量長官ミッチェル (T. L. Mitchell) が英本国へ一時戻ることになっていたため、自らポート・フィリップ地区へ出かけるパーク総督に同行することとなり、2月21日に出発した³⁷⁾。3月9日には、総督からメルボルンとその西南のウィリアムズタウン (Williamstown) の販売用宅地の測量・区画設定の指示を受けて実質的な測量責任者となり³⁸⁾、同月24日にはメルボルンの計画を総督に報告した³⁹⁾。この区画計画図については、「ラッセル氏による小さな集落計画図に、私 (ホドル) がメルボルンの町を示した」ものであると述べており⁴⁰⁾、後に改めて、「総督閣下の指示によって、そこ (ポート・フィリップ地区) における測量庁の仕事の監督と、メルボルンとウィリアムズタウンの町の設計をし、各街路の交叉点における街路名の標識の設定およびすぐに必要となる区画の杭打ち、という職務を遂行した」と説明している⁴¹⁾。ラッセルはヤラ川北岸に南北3区画分、東西8区画分、計24区画からなるメルボルンの街区を予定した図を作成しているが、これが当時ホドルが入手、使用した「小さな集落計画図」であるかどうかは別として、ホドルはパーク総督の指示によって、ラッセルの仕事を基に改めてメルボルンの街区を決定し、街路名を付したものと見られる⁴²⁾。

33) Robert Russell to F.R.D'Arcy and W.W.Darke, 2 November 1836, H.R.V. 5:20.

34) William Lonsdale to Colonial Secretary, 26 November 1836, H.R.V. 5:21.

35) もともと、ラッセルはシドニーの測量に従事していた折から評判がよくなく [H.R.V. 5:1-4]、また彼の二人の部下 (W. Darke, F.R.D'Arcy) もまた、測量長官ミッチェル (T.L.Mitchell) の調査に同行して、それぞれ「馬鹿」ないし「粗野で思慮のない若者」と評されており [H.R.V. 5:20]、三者ともにもともと左遷人事であった。

36) S.A.Perry to Colonial Secretary, 13 January 1837, H.R.V. 5:36-38.

37) S.A.Perry to Robert Hoddle, 23 January 1837, Colonial Secretary to S.A.Perry, 16 February 1837, H.R.V. 5:38-40.

38) Colonial Secretary to S.A.Perry, 9 March 1837, Robert Hoddle to Governor Bourke, 10 March 1837, H.R.V. 5:41-42.

39) Robert Hoddle to Governor Bourke, 24 March 1837, H.R.V. 5:43-45.

40) *ibid.*

41) Robert Hoddle to S.A.Perry, 10 April 1837, H.R.V. 5:58-59.

42) メルボルンの都市計画や宅地の販売状況などについては、[金田 1985:56-63] に詳しい。

また、当時の都市計画などについては [金田 1987] と [金田 1988] を参照されたい。

ラッセル作成図 [金田 1985:57] [H.R.V. 5:22-23] として残っている図の24の街区は確かにホドル作成図と同位置であるが、その説明に "Map shewing the site of Melbourne and the

ラッセルはこのような人事と処置に不満であり、測量長官代理に説明を求めたりしたが⁴³⁾、4月8日付でホドルは正式にポート・フィリップ地区測量庁事務所の責任者に任命され⁴⁴⁾、その後の測量・土地計画の実施を推進した。5月ごろにはポート・フィリップ湾岸がパーク郡と呼ばれ始めており⁴⁵⁾、その西南部は1839年までにはグラント(Grant)郡に分割された【金田 1985:203-206】。1880年代末には、主としてホドルの指揮の下で、パーク・グラント両郡の測量と区画設定が進行し、ホドル自身もその作業に従事した。その結果、ハンドレッドは設定されなかったものの、1マイル方格のセクションと約25平方マイルのパリッシュは、シドニーの測量庁の直接管轄下における部分よりはむしろ整然とした形で設定された【金田 1985:210-219】。

2. R. ホドルの初期測量とアボリジニの地名

メルボルンの都市名そのものがそうであるが、街路名もまた、1837年に命名されたものはすべて英語であった。ところが間もなく、ホドルは測量長官代理のペリーから、「各パリッシュに、その中の丘あるいは場所のアボリジニの表現に基づく名称を選定する」という内容を含む指令を受けとった⁴⁶⁾。

さて、アボリジニの地名を採用する場合には、1829年以来、次のような規定が設けられていた。

アボリジニの名称の綴りと発音の統一性をつくりあげるために、また、地図上には決して望ましくない長い名称の記入を避けるために、下記のような規則でもって、可能な限り少ない字数でその名称を綴ることに十分留意するよう要請せねばならない。

- (1) gで始まる音節には、それに続けてhを使用してはならない。
- (2) アクセントがおかれる音節の末尾を除いて、二重母音ooの代わりに、常に母音uを用いること。
- (3) 名称の末尾をhで終らないこと。

↙ position of the huts and building previous to the foundation of the township by Sir Richard Bourke in 1837”とあることから、パークとホドルによるメルボルンの確定以後に作成されたと考えられる可能性が高い。ホドルによるメルボルンの計画は、ラッセルのものをそのまま踏襲したものでないとする考えも強い【SELBY 1928 など】。

43) Robert Russell to S.A. Perry, 29 March 1837, H.R.V. 5:57.

44) Colonial Secretary to S.A. Perry, 8 April 1837, H.R.V. 5:58.

45) Colonial Secretary to S.A. Perry, 11 May 1837, H.R.V. 5:58. など。

この新郡の設定の正式許可が下りるのは翌年4月3日付 (Lord Glenelg to Sir George Gipps, 3 April 1838, H.R.A. I(XIX):353-354.)。

46) S.A. Perry to Robert Hoddle, 31 July 1837, H.R.V. 5:98-100.

(4) rを2つ続けるのはアクセントのある音節だけで他に使用してはならない。

このように不必要な子音と二重母音を避けることによって、14文字の名称が9文字で表現されるであろう。Bherrah-wherree が Beraweree に、Ghoolan-ghoolah が Gulangulah^(マ)に、Bhroulhee が Brulee に、Goulahpatamboh が Gulapatambo になるごとく、丘のユーカリのように無駄の多い文字からなる多くの単語が短く表記される⁴⁷⁾。

すなわちホドルは、この規定に従ってアボリジニの地名をパリッシュ名として選定すべきことになった。さらに翌年には、パリッシュ名のみならず、地名全般についてアボリジニの呼称を採用すべき指示が加わった。パークの後任の新総督ギップス(G. Gipps)からの指示として、官房長は次のように伝達した。「地名が付される場合にはすべて、すでにアボリジニによって使用されている地名を可能な限り採用すること、およびすでに他の郡において充当されている名称を使用することを避けるのが閣下のお望みである。従ってジロング(Geelong)の名称は、すでに固定しているメルボルンと同様に使用し続けることになる」⁴⁸⁾。

ホドルはこのような指令を、セクションやパリッシュの設定の際と同様に、比較的忠実に履行した。1840年9月までの測量・区画設定の結果を、ギップス総督から英本国へ報告した地図⁴⁹⁾によれば、図2・3のように、パーク郡・グラント郡のパリッシュ名や川名のほとんどが、アボリジニの名称を採用している。

アボリジニの名称はパリッシュ名のみならず各所に計画された中心集落にも採用された。1839年にヤラ川上流部に計画されたワリングル(Warringal)は鷲の巣という意味のアボリジニの名称をとったものであった⁵⁰⁾。このような名称は、上述の原則に照らしながら総督府と測量庁でチェックが行われたので、時にシドニーで変更される場合があった。ワリングルの場合、町名自体は問題なく承認されたが、4つの街路名が変更された⁵¹⁾。

47) Mitchell's Instruction to Surveyors, 5 September 1829, H.R.V. 5:xviii., 但し, "Bhroulhee for Brulee" となっているのを、全体の文意にしたがって逆にした。

48) Colonial Secretary to William Lonsdale, Melbourne Police Magistrate, 5 April 1838, H.R.V. 5:xviii.

49) Map Shewing the Surveyed Lands at Port Philip from the Government Surveys, John Arrowsmith, 1840 (Sir G.Gipps to Lord John Russell, 28 September 1840, Appendix)

50) H.R.V. 5:378.

51) S.A. Perry to Colonial Secretary, 19 November 1839, Colonial Secretary to S.A. Perry, 14 December 1839, H.R.V. 5:385-387.

Madeira, Bronte, Lisbon, MalmseyがDarebin, Banksia, Yarra, Bucklandに変更された。

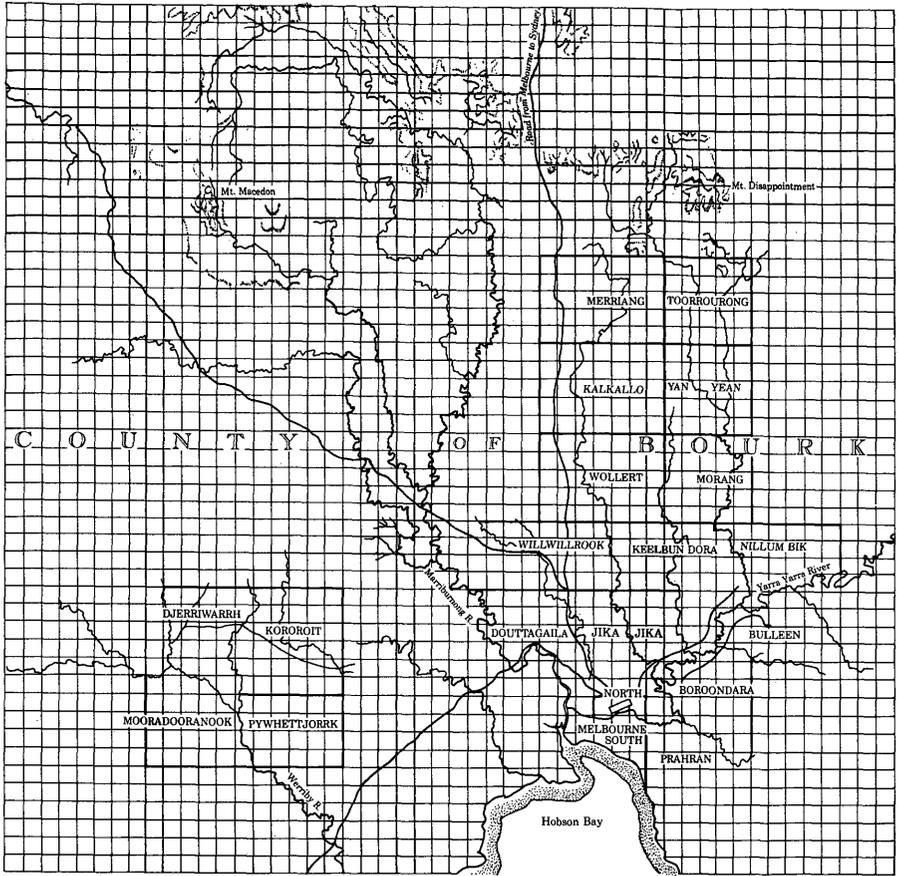


図2 R. ホドルによる1840年までのパリッシュの設定
(パーク郡, John Arrowsmith, Map Shewing the surveyed Lands at Port Philip, 1840)

さて、このようなアボリジニの名称を調べるためには、すでに入り込んでいるスクォッター (squatter) と呼ばれた牧羊業者達から聞くのが最も安直な方法であろうが、ホドルや他の測量官が直接にアボリジニとコンタクトをとったことも多かったと思われる。すでに前述のラッセルへの訓令において、アボリジニを雇用することや、何らかの役に立つ場合の贈物を準備することが指示されている⁵²⁾。ホドルは、測量記録のみならず多くの水彩の風景画を残しているが、入植者や牧羊風景などを描いたもののほかに、アボリジニの様子を描いたものがある⁵³⁾。これらは、いずれも平和でのどか

52) S.A. Perry to Robert Russell, 10 September 1836, H.R.V. 5:6-8.

S.A. Perry to Robert Russell, 15 September 1836, H.R.V. 5:10.

53) H.R.V. 5:76-77.

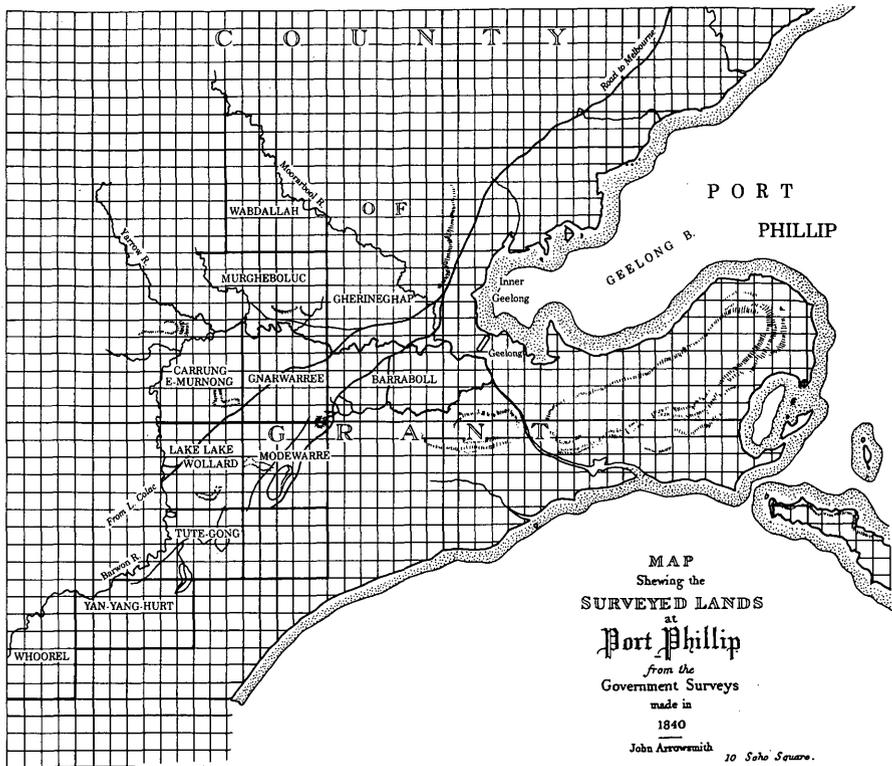


図3 R. ホドルによる1840年までのパリのッシュの設定
(グランド郡, John Arrowsmith, 図2と同様)

な生活風景であるが、現実には測量隊とはしばしば緊張関係に陥った。アボリジニの生活領域に直接踏み込んで測量をする訳であるから、これは当然の結果であるが、前述のように測量隊には銃が配備されることになっていた。

ポート・フィリップ地区に赴任して程なく、ホドルは友人へ彼の気持を書き送っている。「私はここでは銃を携行することを余儀なくされている。羊飼いは火縄銃を持っている。アボリジニは信用できない。私は彼等の誰もがテントのところに来るのを許さない。もし彼等が暗くなってからやって来たら、彼らは鉛玉をくらわねばならない。私は二連銃でなくて単銃身の銃を持って来たのが馬鹿だったと思う」、というのである⁵⁴⁾。彼にとってはアボリジニも、スコッターの羊飼いや共に警戒すべき敵であった。

ホドルがこのような感情を吐露した3週間後、彼の部下の測量隊が食糧をアボリジ

54) Robert Hoddle to James White of the Australian Company, 4 July 1837, H.R.V. 5:93-94.

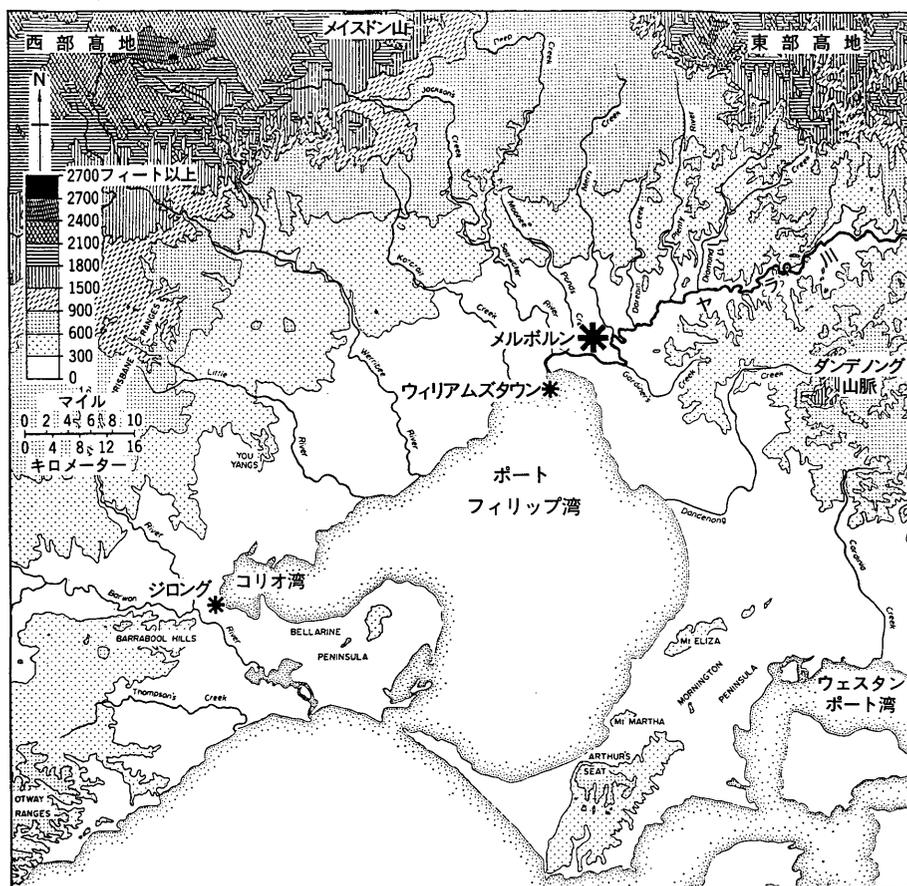


図4 ポート・フィリップ地区主要部の概要

に盗まれた⁵⁵⁾。また測量隊は、荷役用家畜がアボリジニに驚かされないように見張りを立てることや、アボリジニを刺激して敵対行動を起こさせたりしないために、隊長のいないところで隊員がアボリジニとコンタクトを取ってはいけないことなど、実に事細かな指示を受けていた⁵⁶⁾。1838年8月18日には、ホドルは改めて測量長官代理に手紙を書き、最近アボリジニが敵意を示しているので測量隊の防御用武器の不足を補うよう求めている⁵⁷⁾。翌年2月にはさらに、銃が供給されないならば、測量官は職務を果そうとしない、と重ねて申し入れている⁵⁸⁾。銃の必要性は測量官にとっては極

55) F.R.D' Arcy to William Lonsdale, 25 July 1837, H.R.V. 5:97.

56) S.A. Perry to H.C.D. Butler, 22 January 1838, H.R.V. 5:152-153.

57) Robert Hoddle to S.A. Perry, 18 August 1838, H.R.V. 5:270.

58) Robert Hoddle to S.A. Perry, 5 February 1839, H.R.V. 5:270.

めて大きなものであり、彼等は常にアボリジニの来襲という事態を恐れ、また想定していたのである。しかも、現実にはアボリジニによる殺人も発生していた⁵⁹⁾。

測量隊は、そこを生活基盤として来たアボリジニにとってはもちろんのこと、そこへ先になだれ込んだ白人の牧羊業者にとっても、歓迎されざる侵入者であった。

Ⅳ. アボリジニの保護と教化

1. G. A. ロビンソンの活動

オーストラリアにおいて英国植民地が始まったその1788年に生まれたロビンソンは、1823年に英国からタスマニアへ入植し、建築業者として成功したが、余暇を使って熱心に宗教的活動を行った。先述のバットマンがアボリジニの捕縛隊を組織して活動していた時期のタスマニアにおいて、彼はアボリジニの「調停員 (conciliator)」に任命されるよう申し出てアーサー準総督を感激させた⁶⁰⁾。彼は「攻撃的でないアボリジニ」と平和に生活することを主張したが、当時のタスマニアでは全く受け入れられなかった。しかし、悪名高きブラック・ライン計画の失敗の後、アーサーはアボリジニの教化に意欲的なロビンソンにたよるようになった。

ロビンソンは残ったアボリジニを「約束の地」に連れて行こうとした。1831年から翌年にかけて、小さなグループに分けてバス (Bass) 海峡の小さなガン・キャリッジ (Gun Carriage) 島に送ったが、アボリジニ達は生きる意欲を失い始めたので、もっと大きなフリンダーズ (Flinders) 島へ移すことになった。約40人がガン・キャリッジ島からフリンダーズ島へ移されたが、彼等は死ぬために連れてこられたと信じ、何の解決にもならなかった。1832年から35年にかけて約200人がさらにタスマニアからフリンダーズ島に送られ、そこでヨーロッパ式の衣服や小屋を与えられ、教育・教化を受けた。ロビンソン自身も現地で所長としてこのために尽力した。しかし、条件の悪い同島でアボリジニの死亡が相次ぎ、やがて本国政府の政策転換に伴って、1847年には残った44人と若干の混血のアボリジニがタスマニアへと戻された [LAIDLAW 1981]。

さてロビンソンは1835年、保護と教化を進めるために、タスマニアのアボリジニを

59) たとえば次の報告書などは、きわめて具体的にその説明をしている。

T.H.Nutt to S.A. Perry, 17 June 1839, H.R.V. 5:371-374.

また、白人とアボリジニとの抗争については [H.R.V. 2A:36-61] に詳しい。

60) H.R.V. 2A:3.

オーストラリア本土へ移すことを提案した⁶¹⁾。この提案は本国政府に伝達されたが、採用には至らなかった⁶²⁾。しかしこのころから、アーサーの提言などを契機として、法的権限を有したアボリジニ保護官 (protector) を設置すべきとの考えが強くなり始めた⁶³⁾。この保護官はやがて、「あらゆる点で地方 (植民地) 政府ないし地方政府の構成員や機構と結びつくことなく、独立しているべき」ものであると考えられるようになった⁶⁴⁾。

この構想は南オーストラリア植民地の新設に伴って現実的になり、1836年2月11日付で、英本国政府はロビンソンないし彼の息子をそのアボリジニ保護官に任命する案を示した⁶⁵⁾。しかし、提示された年棒250ポンドでは活動ができないとして二人共これを拒否した。翌年年棒を2倍にする案が再提示されたが、退任してロンドンに引き揚げたアーサーの進言もあって、結局年棒500ポンドでロビンソンがポート・フィリップ地区の主任保護官に就任することとなった。1837年12月21日付で4人の副保護官も任命され、彼等は1839年1月にはメルボルンに着いたが⁶⁶⁾、ロビンソン自身の到着はこれより遅れて2月27日のことであった⁶⁷⁾。

この間、対アボリジニ政策が全面的に再検討され、保護官の職務についても同様に検討が加えられた⁶⁸⁾。1838年1月31日付で伝えられた保護官の職務は、おおよそ次のような内容であった⁶⁹⁾。

- 1) 可能な限り担当地区内の部族と連絡をとり、可能であればより定着した生活に誘導できるまで移動に付き添い、また信頼を得て、彼等に友人であると感じさせること。
- 2) アボリジニの権利や関心を注視して個人的に可能な限り彼等を保護し、彼らの

61) G.A.Robinson to John Montagu, 11 February 1835, H.R.V. 2A:10-12.

62) H.R.V. 2A:3.

63) *ibid.*

64) Sir George Grey to A.Y. Spearman, 30 January 1836, H.R.V. 2A:18.

65) Lord Glenelg to George Arthur, 11 February 1836, John Montagu to Kenneth Snodgrass, n.d., H.R.V. 2A:19-21.

66) H.R.V. 2A:4.

Sir George Grey to James Dredge, E.S. Parker, C.W. Sievwright and William Thomas, 21 December 1837, H.R.V. 2B:366-367.

上記のJ.Dredge, E.S.Parker, C.W. Sievwright, W.Thomasの4人。

67) H.R.V. 2B:434.

Journal of William Thomas, 4 January 1839, H.R.V. 2B:435.

68) Report from the Select Committee on Aborigines (British Settlements) : House of Commons, 26 June 1837 (extract), H.R.V. 2A:62-69.

69) Lord Glenelg to Sir George Gipps, 31 January 1838, H.R.V. 2B:373-375.

願望を忠実に代弁して、必要であれば主任保護官を通じて総督に伝えること。

- 3) 特定の場所において、ある人数のアボリジニが生活することが可能となれば、彼等をはげまして耕作させ、彼等の居住に適した家を建てさせること、また彼等の文明化と社会的な改善に努めること。
- 4) 子供の教育は可能な限り早くから、広範に実施すること。
- 5) キリスト教の教化によって、アボリジニのモラルと信心の改善を進めること。
- 6) 可能な限りアボリジニの言語を学び、自由にかつ親しく意見交換ができるようにすること。
- 7) アボリジニに支給するための食糧・衣料を管理し、数量を確認すべきこと。
- 8) 管轄地のアボリジニの人数と彼等に必要な事柄について、可能な限り多くの正確な情報を得ること。

要するに、アボリジニに可能な限り近づいてその情報を収集しつつ彼等を保護し、同時に白人の生活・習慣への同化を進めるのが保護官の職務であったことになる。

ロビンソンは主任保護官に就任したが、フリンダーズ島へ移したタスマニアのアボリジニの内、生き残っている80人余のことを依然として気にしていた⁷⁰⁾。バン・ディーマンズ・ランドのフランクリン (J. Franklin) 準総督は彼等を本土へ移すことに賛成であったが、ニュー・サウス・ウェルズ政府のアボリジニ委員会の方は、本土の入植者に「潜在的な凶暴さ」とでもいえるようなものを加えないように、現在地から移動させないよう決定した。従ってギップス総督はロビンソンに、個人的な使用人かつポート・フィリップ地区のアボリジニとのコンタクトのために、1家族だけを連れてくることを許可したに過ぎなかった。前述のように1839年2月にロビンソンがメルボルンへ向った時には、彼は8人のアボリジニを伴い、4月に彼の妻と家族がさらに6人を伴ってやって来た。これに密航者が2人加わって計16人のアボリジニをフリンダーズ島から連れて来たことになるが、ロビンソンはその詳細を報告するのをいやがり、報告書は12月12日まで提出されなかった。

彼らは持参の食糧が尽きた後、ポート・フィリップ地区のアボリジニのための非常用を給されたが、その後正式に食糧支給が認められたのは4人分でしかなかった。食糧支給が少なくなると、次第に林野に消えるアボリジニが増え、後に女性1人が羊飼いと生活しているのが発見され、2人の男が強盗の一味として絞首刑となり、3人の女性がフリンダーズ島に送還された。

70) 以下のロビンソンとタスマニアのアボリジニについては、[H.R.V. 2B:392-393]による。

4人の副保護官はロビンソンより早くメルボルンについてヤラ川河畔でテント生活を始めたが、例えばそのうちの1人ドレッジ (J. Dredge) は、テント生活による妻の病気などもあって、アボリジニを支援するという夢にかられて英国からやって来たことを早くも後悔していた⁷¹⁾。

さて、ポート・フィリップ地区のアボリジニ達は、主任保護官が到着すれば、ただちに十分な食糧・衣料その他の贈物が支給されると信じるようになり、数百人がメルボルン周辺に集まった。従って部族間闘争が不可避免的に発生し、一度は数人が負傷して副保護官達に救助されるなどの混乱が相次いだ。ロビンソンがアボリジニの期待にこたえるためになし得ることは、ヤラ河畔で催し事を企画することであった。1839年3月28日、パン・牛肉・羊肉を約300人にふるまい、ついで火縄銃の展示や槍投げ会を催し、午後の御茶と夕刻の御祭り騒ぎへと続いた⁷²⁾。

一方ロビンソンは、4人の副保護官を北方のゴールバーン (Goulburn) 川地区、メルボルン南西のジロング地区、北西のメイスドン山 (Mount Macedon) 地区、東南のウエスタンポート (Westernport) 地区に割り当て、荷物運搬用牛車の手配の問題などで混乱はあったものの、1839年中ごろまでにほぼ目的地へ向った⁷³⁾。ウエスタンポートの担当となったトーマス (W. Thomas) だけは、しばらくはヤラ河畔に残ったり、任地から戻ったりしてロビンソンを助け、ヤラ河畔にやって来て戻らないアボリジニへの対応に尽力した。特に、当時輸出用として価値が高かった琴鳥の尾をとるために、ヤラ河畔だけでも30挺の銃を白人業者がアボリジニに渡しており、ほとんどの場合、これが悲劇的な結果をもたらした。白人の持ち込んだ性病にかかったアボリジニも、ヤラ河畔にたくさん集まった。トーマスは詳細な行動記録を残しているが、その中にはヤラ河畔における強姦・売春の記録が含まれ、とりわけ多くのアボリジニの男が女をラム酒などと交換する様子に落胆している⁷⁴⁾。

初期のメルボルンの白人入植者達は、死にそうなアボリジニに対して割く余裕も時間も概して十分ではなかった。アボリジニの文明化や教化の努力も食糧支給が少なくなるとすぐに効果を失った。メルボルンの為政者達は、アボリジニをメルボルンから離そうとし、軍・警察の力で銃を持ったアボリジニを押える代わりに、保護官を通じてアボリジニを説得してヤラ河畔を立ち去らせようとした。しかしそれも不成功であったり、一旦離れたとしてもすぐに食糧・タバコ・アルコールを求めて戻る場合が多

71) Journal of James Dredge, January to May 1839, H.R.V. 2B:419-431.

72) H.R.V. 2B:434-435.

73) *ibid.*

74) The Journal of William Thomas, 1 April 1839-21 December 1839, H.R.V. 2B:520-575.

く、むしろそのような白人的影響を与えたことについて非難された⁷⁵⁾。

政府に対して、アボリジニへの食糧支給の増加を求めているロビンソンは、このような事態を経て、それが害悪をもたらすだけだと考えるようになった。1839年末には、シドニー政府の考えに合致するように、幾つかの地点において「労働やよい行動」に対する報償としてのみ、食糧や衣料を給するように決定した。彼は、やがてキリスト教の教化だけが、真に有効であると考えようになった⁷⁶⁾。

2. J. R. オートンの活動

1835年における、ニュー・サウス・ウェルズのバートン (W. W. Burton) 判事との合意に基づいて、パーク総督はポート・フィリップ地区に政府のミッションを設置することを決定し、その宣教師にラングホーン (G. Langhorne) を任命した⁷⁷⁾。政府の「アメとムチ」政策の一環として、アボリジニが定着してヨーロッパ的な市民となるよう、労働と協力的行動に対して土地・食糧・衣料を給するのが目的であった⁷⁸⁾。1836年末にポート・フィリップ地区に到着したラングホーンは、ヤラ川南岸に895エーカーのミッション用の土地を確保することとなり、翌年6月にはホドルによってその場所が測量・設定された⁷⁹⁾。

ラングホーン夫妻はここに管理人夫妻と共に住み、教化活動を開始した。彼は予期以上の成果だと報告し、親がどこかへ出て行った時も子供がそこに残ったとした。1837年8月には、活動の拡大をするために教師や倉庫管理人などを求め、それがほぼ認められた⁸⁰⁾。しかしこのまま順風が続いたのではなく、この翌年ごろからヤラ川河畔に集まり始めたアボリジニをめぐる混乱はすでに先に述べたところである。

このような政府のミッションと相前後して活動を開始したのはメソジスト派であった。メソジスト派は多くの新しい入植地における教化活動を支援していた。タスマニアの牧師であったオートン神父は、1836年1月20日にロンドンのメソジスト派協会に手紙を書いた。ポート・フィリップ地区は、スコッターやその雇人達が部族生活を破壊する前に、至急教化活動を開始するに適した土地だというのである⁸¹⁾。4月には

75) H.R.V. 2B:517-520.

76) H.R.V. 2B:435.

77) H.R.V. 2A:153-154., 以下、政府のミッションについては、同書による。

78) Colonial Secretary's draft memorandum, 9 December 1836, H.R.V. 2A:161-165.

79) S.A. Perry to Robert Hoddle, 6 June 1837, H.R.V. 5:90-91.

80) H.R.V. 2A:153-154.

81) Rev. J.R. Orton to Wesleyan Missionary Society, 20 January 1836 (extract), H.R.V. 2A:77-78.

メルボルンに到着し、そこでの最初の説教を行った⁸²⁾。8月には、メルボルンの周辺60マイル以内に約1000人のアボリジニが狩猟・採集生活をしており、「最も墮落した未開人」であり、緊急にキリスト教の教化を必要とする、とロンドンに報告している⁸³⁾。

オートンの考えは、アーサー準総督やパーク総督に受け入れられたが、彼の活動のために、メルボルンにすでに設置されていた政府のミッションから「適当な距離」のところに、メソジスト派のミッションのための土地を提供し、資金援助をするという正式許可は12月まで遅れた⁸⁴⁾。しかも、ロンドンの協会からの支援を得るためにさらに待たねばならず、1838年3月に漸く数人のメソジスト派の宣教師がホバートに到着した⁸⁵⁾。

同年5月、オートンはシドニーを訪れて新総督ギップスに会い、具体的な支援の要請をした⁸⁶⁾。メソジスト派のミッションの計画は、すでに発足していた上述のような政府のそれと類似していたが、すでに政府のミッションの成功が疑問になり始めていたことから、ギップスはこれを認めたようである⁸⁷⁾。しかし、オートンが求めた16平方マイルの土地は広すぎるとして難色を示した⁸⁸⁾。

8月になるとオートンの下に派遣されたタックフィールド (F. Tuckfield) 神父がジロングの西約30マイルのところに適した土地があると報告している⁸⁹⁾。オートンはこれを認め、早くそこを占拠し、熟練した管理人の下で、友好的なアボリジニに農業をさせるようにアドバイスした。タックフィールドはこれに従って活動を開始したが、農業では多少の成果があったものの、教化の点では全く成果がなかった⁹⁰⁾。彼はアボリジニの言葉を覚えると、彼が表現した思想がアボリジニの伝統的なそれとぶつかって拒絶されるように感じた。しかし彼の努力は伝わって、アボリジニの信頼を得た⁹¹⁾。

オートンはロンドンの協会にさまざまな報告をしている。中には、白人の入植がア

82) H.R.V. 2A:75.

83) Rev. J.R. Orton to Wesleyan Missionary Society, August 1836, H.R.V. 2A:80-89.

84) Colonial Secretary to Rev. J.R. Orton, 10 December 1836, H.R.V. 2A:93.

85) H.R.V. 2A:75.

86) Rev. J.R. Orton to Sir George Gipps, 3 May 1838 (extract), H.R.V. 2A:93-96.

87) H.R.V. 2A:76., Colonial Secretary to Rev. J.R. Orton, 7 May 1838, H.R.V. 2A:97.

88) Rev. J.R. Orton to Colonial Secretary, 18 May 1838, Sir George Gipp's minute, 21 May 1838, H.R.V. 2A:97-98.

89) Rev. F.Tuckfield to Wesleyan Missionary Society, 12 August 1838 (extract), H.R.V. 2A:104-108.

90) H.R.V. 2A:76.

91) Rev. F.Tuckfield to Wesleyan Missionary Society, 20 February 1839, H.R.V. 2A:112-115.

ボリジニの狩猟・採集地を奪ってその生活を破壊して死に至らしめていること⁹²⁾、新しく任命された保護官と協力してやっていきたいこと⁹³⁾、などが含まれていた。また、1839年4月には、妻にあてて、メルボルンの変化が急激であることに驚き、またメルボルンのすぐ近くに4~500人のアボリジニがおり、彼らの夕方の踊りに感動したが、同時その墮落した状況をなげき、また彼等から彼等の信頼を得たタックフィールドの名と変則的な英語の片言を聞いたと記している⁹⁴⁾。前述のロビンソンが企画した催しの約1ヵ月後のことであり、まだ続いていた混乱の様子に他ならない。さらに、アボリジニが子供を食べたという食人の例の報告もある⁹⁵⁾。

さて、16平方マイルの土地の下付に難色を示していたギップス総督は、やがて実験的に5年間の使用を認めようとしたが、測量長官代理のベリーに反対された。ミッションは白人と家畜からアボリジニを隔離する希望を失いかけた。しかし1839年9月、ジロングの警察長官が、前述のようにすでに先行して開設されたミッションを見学してこれを支援するようになり、結局ミッションの5マイル以内にスコッターやその羊飼いの立ち入りが禁止された。このミッションではアボリジニの子供の教育や、移動する部族との連絡・交流がはかられた⁹⁶⁾。

1840年5月、ポート・フィリップ地区の責任者であるラ・トロブ (C. J. La Trobe) への報告によれば、このミッションの状況は次のようであった⁹⁷⁾。平均60人のアボリジニが耕作を手伝いつつミッションの施設を使用し、何人かの子供は文字が読めるようになり、12人の女の子が裁縫をおぼえたという。しかし同時に、各部族の人口が急減したり、絶滅したりしていること、白人と接触して病死する例や、老齢ないし闘争で死亡する例があること、また白人との間の混血の子供が生まれた時にほとんど殺されること、なども報告されている。

この段階では、オートンが企画したメソジスト派のミッションそのものはまだ希望があるかに見えた。しかしその後次第に矛盾が表面化し、1848年には失敗に帰した⁹⁸⁾。

92) Rev. J.R. Orton to Wesleyan Missionary Society, 19 October 1838 (extract), 13 May 1839, H.R.V. 2A:110-111, 116-123.

93) Rev. J.R. Orton to Wesleyan Missionary Society, 9 January 1839 (extract), H.R.V. 2A:111.

94) Rev. J.R. Orton to Mrs. Sarah Orton, 20 April 1839, H.R.V. 2A:115-116.

95) Rev. F. Tuckfield to Wesleyan Missionary Society, 13 March 1839, H.R.V. 2A:115.

96) H.R.V. 2A:76-77.

97) Rev. B. Hurst to C.J. La Trobe, 7 May 1840, H.R.V. 2A:148-150.

98) H.R.V. 2A:77.

V. お わ り に

以上のように、1830年代のポート・フィリップ地区では、さまざまな混乱と試行の中に、アボリジニは急速に衰退への道をたどった。バットマンが最初に上陸してからわずか4年余しか経てない1840年には、これとは逆に激増した白人の方はすでに1万人を越えていた。白人のアボリジニへの対応は、個人的な経済的利益のためや白人女性が少ないための性のはげ口としての功利的利用、為政者としての見識やキリスト教的立場からの善意ないし平等的意識による同化・教化・隔離の動き、行政官ないし管理者としての秩序維持を目的とした武力行使、単なる興味・恐怖に由来するかさらに悪意をもった武力行使、などに分れる。これらの対応はいずれも、すでに見てきたようにアボリジニの生活のデリケートなバランスをくずし [CHRISTIE 1979:4-52]、その生活基盤を破壊し、さらには直接的に彼等を殺害するという結果をもたらした。ヨーロッパから持ちこんだ物資もまた同様であった。

例えば、バットマンの使用人となったアボリジニも、彼の病気によって目がとどかなくなると、多くのアボリジニの場合と同様にアルコールにおぼれて事件を起こした⁹⁹⁾。アルコールの存在そのものが、アボリジニ社会を大きく傾けることになったが、混乱と試行を重ねた政策は、これについても全く無力であった。

ニュー・サウス・ウェルズ立法議会は、1839年に境界警察の設立を法制化した。これはアボリジニと白人の双方を平等な裁判に持ち込むためのものであったが、ほとんどの警官が退役軍人や開放流刑囚であったために、しばしばスコッターの側の武装兵のような役割を果たすことになり、アボリジニの敵となった¹⁰⁰⁾。

ロンドンやシドニーではアボリジニの法的権利をめぐる様々な議論が行われたが、その結果が、アボリジニ自体にとっては全くプラスにならなかったことはすでに述べたところである。為政者は大概リベラルであったか、そうあろうとした。英本国の植民地担当国務大臣となったラッセル (J. Russell) は、1839年12月21日、ギップス総督に対し、彼の政府が「もともと侵略したのは我々自身である」ということを忘れることは不可能である、と書いた¹⁰¹⁾。しかし、そのような感傷は多々あったとしても、現実には有効な形で実施し得なかったことは、アボリジニの人口の激減が示している

99) H.R.V. 2A:201.

100) H.R.V. 2B:748.

101) Lord John Russell to Sir George Gipps, 21 December 1839, H.R.V. 2B:767-768.

ころである。

「たき火はポート・フィリップのあらゆるところから消えてしまい、もう再び燃えることはない」¹⁰²⁾。ただ、かつてアボリジニが呼びならわした地名だけが、いまでもそこに残っている。

文 献

- CAMPBELL, A.H.
1987 *John Batman and the Aborigines*. Victoria: Arena Printing Group.
- CHRISTIE, M.F.
1979 *Aborigines in Colonial Victoria 1835-86*. Sydney: Sydney University Press.
- ROLL, R.H. & R.R. WETTENHALL
1937 *A Pioneer of Melbourne and Founder of Geelong*. Robertson & Mullens.
- 金田章裕
1985 『オーストラリア歴史地理—都市と農地の方格プラン』 地人書房。
1987 「ニュー・サウス・ウェルズ植民地における中心集落の計画とその実施—19世紀前半のハンター河谷を中心に」『オーストラリア研究紀要』12:115-132。
1988 「オーストラリアの開拓と土地計画」『オーストラリア研究紀要』14:41-60。
- LAIDLAW, R.
1981 *European Settlement and the Effects on Aboriginal Society*. In T. Gurry(ed.), *The European Occupation*, Heinemann Editorial Australia, pp.44-72.
- SELBY, I.
1928 *Robert Hoddle and the Planning of Melbourne*. *The Victorian Historical Magazine* 13(2):55-64.
- SMITH, L.R.
1980 *The Aboriginal Population of Australia*. Canberra: Australian National University Press.
- TINDALE, N.B.
1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits and Proper Names*. Canberra: Australian National University Press.
- TURNBULL, C.(ed.)
1948 *Black War: The Extermination of the Tasmanian Aborigines*. Cheshire.

原典の所在および略号

1. Historical Records of Australia, Melbourne, Victoria -> H.R.A.
2. Historical Records of Victoria, Melbourne, Victoria -> H.R.V.
3. State Library of Victoria: La Trobe Collection, Melbourne, Victoria -> LT.C.
4. State Library of New South Wales: Mitchel Library, Sydney, New South Wales -> M.L.
5. Tasmanian State Archives, Hobart, Tasmania -> T.S.A.

102) H.R.V. 2B:750.